



万葉からみた大津

万葉集20巻4500首の歌の中で、近江国に関係をもつ歌は100首を越え、約3割の率を示しています。これは府県を単位としてみる時奈良県・大阪府に次ぐ高い数値を示します。単に数値を誇るだけでなく、質的にも万葉集を代表する数々の名歌が近江国で詠まれています。その作者をあげますと、第Ⅰ期には額田王・大海人皇子、第Ⅱ期には柿本人麿・高市黒人、第Ⅲ期には大伴坂上郎女・笠金村、第Ⅳ期には笠郎女・中臣宅守など、万葉集を代表する作者が並んでいます。本シリーズで紹介する大津市にも、人麿の代表作をはじめ幾多の名作がのこされています。以下はじめに地名をあげ少しばかり解説をつけてまいりましょう。

逢坂山

大化2年(646)1月、大化改新の詔がくだりました。公地公民の制度・班田収授の法なども、この詔によって始められました。

その詔のなかに

「およそ畿内は……中略……北は近江の狭狭波の谷坂山よりこなたを畿内国となす」と定められました。

国や郡、村の境には、おそらく歴史のはじまる前から、外から来る邪悪な神や霊を防ぐため、力の強い神を祀りました。そこを通る人々は必ず手向の幣をたてまつり、それのない時は着ている着物の袖をちぎって捧げたといいまします。まして畿内と畿外をわかす逢坂山には、強い威力のある神を祀ったに違いありません。

●木綿置手向の山を今日越えていづれの野
辺に廬せむわれ 卷6 1017

この作品は天平9年夏4月大伴坂上娘女が今の京都市の賀茂神社の祭をおがみ、相坂山を越え、ゆうぐれに帰って来て作った歌であるという題のことばをとまなっています。

天平9年という年は、外交的には新羅に使



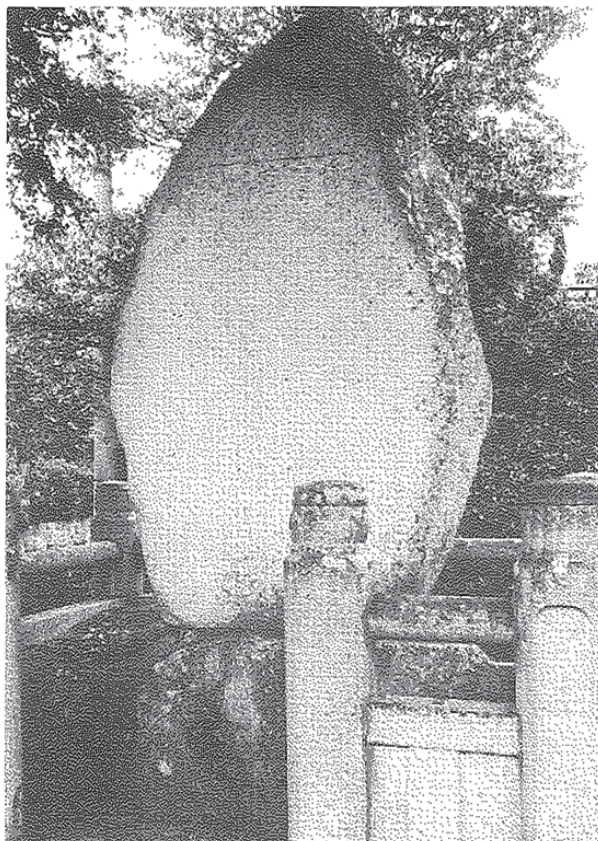
逢坂山より大津を望む

いた人々が日本に帰ってきて、新羅無礼の報告をし、朝廷はそれにもとづいて、神々にその報告と日本の安全を祈願しました。内政的には、大陸から侵入してきて、九州からひろがりはじめた「天然痘」が全国に流行し、政治の中枢を占めていた藤原氏をはじめ貴族たちが次々に死去してしまい、たいへんな騒ぎが起った年でした。そうした不安感をこの歌の背景としてみますと、下句の「いづれの野辺に廬せむわれ」の不安感がいっそうまなましく感じられるのではないのでしょうか。

- 相坂をうち出でて見れば淡海^{あふみ}の海白木棉花^{しらばな}に波立ちわたる 卷13 3238
- 吾妹子^{わがむすめ}に逢坂山^{おうさか}を越えて来て泣きつつ居れど逢ふよしもなし 卷15 3762
- 吾妹子^{わがむすめ}に相坂山^{あひらき}のはだ薄穂^{うすほ}には咲き出でず恋ひ渡るかも 卷10 2283

大津京

日本書紀に「天智天皇6年3月、都を近江に移したまひき」という記事があります。今近江神宮ではこの日を太陽暦に換算して4月



大津宮跡の碑

20日に例大祭を行なっています。10年12月3日、天皇が崩ぜられ、ついで壬申の乱(672)の勃発で、近江朝が敗れ、都は再び大和国に移されました。大津京を詠んだ作品の代表作は、



大津宮掘立柱建物跡

近江の荒れたる都を過ぐる時、柿本朝臣人麿の作る歌

- 玉だすき 敵火^{かたひ}の山の 檀原^{たんげん}の 日知^{ひち}の御代^{みよ}ゆ 生まれましし 神のことごと つがの木^{つぎのき}の いやつぎつぎに 天の下 知らしめししを 天^{あま}にみつ 大和^{おほ}を置きてあをによし 奈良山^{なら}を越え いかさまに思ほしめせか 天^{あま}ぞかる 夷^ひにはあれど石走^{いし}る 淡海^{あふみ}の国の 楽波^{らくなみ}の 大津^{おほつ}の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇^{すめみま}の神の尊^{みこと}の大宮^{おほのみや}は ここと聞けども 大殿^{おほのみや}は ここといへども 春草^{はるぐさ}の 繁^{さか}く生ひたる 霞^{あせ}立ち 春日^{はる}の霧^{きり}れる ももしきの 大宮^{おほのみや}処^{ところ} 見れば悲^{かな}しも

卷1 29

の長歌であります。この作品は必ずといってよい程、高等学校の古典の教科書に採録されていますから、学習された方も多いでしょう。大津京は、長年、「幻の宮」といわれ、その確たる所在地が判明しませんでした。湖西線の開通による事前調査や、大津市錦織周辺住宅建設に伴う調査などの結果、昭和53年2月、御所之内周辺に大津京が存在したことが断定されました。ただ日本書紀に再三火災が発生した記事があり、そうした痕跡を示すものが発掘される日を期待したいものです。

志賀山寺（崇福寺）

穂積の皇子に勅して近江の志賀の山
寺に遣はす時、但馬皇女の作りまし
し御歌

- 後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道
のくまみに標結へわが背 卷2 115

作者但馬皇女は天武天皇の皇女です。はじめ異母兄高市皇子の妃となられたのですが、こともあろうに、異母兄穂積皇子と不倫な関係を結んでしまわれました。この二人の間には道ならぬ関係があったことを示す恋の歌が万葉集にのこされています。この作品もその1つです。倫理的にはともかく、文学的には、恋が命であった古代女性のはげしさを示す作品とってよいでしょう。志賀山寺は崇福寺のこと。天智天皇7年1月の創建ですが何度かの火災の後、園城寺の末寺となっていました。昭和15年の発掘調査で三重の塔の心礎から舍利容器が発見され、国宝に指定され、今は近江神宮の所蔵するところとなっています。

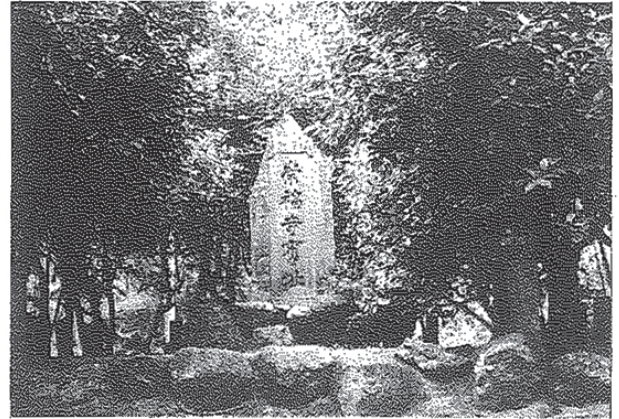
唐崎

平安時代の作品「蜻蛉日記」や「源氏物語」に載る場所として、唐崎は都の人々にもよく知られていたようです。万葉集では先の人麿の長歌の反歌としての2首

- ささなみの志賀の辛崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ 卷1 30
- ささなみの志賀の大わた淀むとも昔の人



唐崎の松



崇福寺跡の碑

にまたも逢はめやも 卷1 31
で有名です。天智天皇の崩御ののち殯の宮をここに造営し、数々の挽歌が作られました。

- かからむの懐知りせば大御船泊てし泊りに標結はましを 額田王 卷2 151
- やすみししわご大君の大御船待ちか恋ふらむ志賀の辛崎 舍人吉年 卷2 152

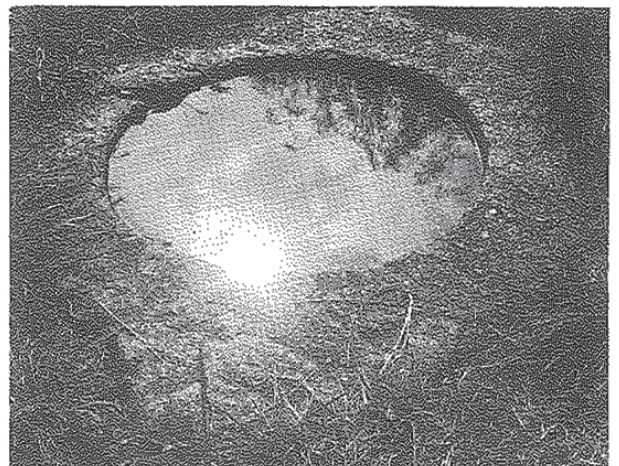
これらの作品は万葉集でもすぐれた作品で、創作に際して作者の心がよく繋がっていてその調べも高いことが、何度も口ずさんでいるうちにひしひしと感ぜられます。

志賀

近江の国より上り来る時、刑部垂麿の作る歌1首

- 馬ないたく打ちてな行きそ日ならべて見てもわが行く志賀にあらなくに 卷3 263

今でこそ滋賀県と行政区分では大きな地名となっていますが、昔は郡の名前でした。こ



南滋賀廃寺塔心礎

の1首の志賀は、現在の滋賀里とか南志賀のあたりではないでしょうか。そのあたりの丘陵地帯を縫って官道は通っていたのでしょうか。眺望は湖西線からの眺めのように、低く琵琶湖を見おろす感覚に該当するのではないのでしょうか。率直な感動をのべた、こころよい作品です。

三 川

- 三川の淵瀬もおちず小網さすに衣手濡れ
ぬ干す児は無しに 卷9 1717

この1首の三川については、三河の国説もありますが、古くから大津市の北、日吉神社の境内を流れる大宮川という説が有力でした。伝教大師は三津首家の出身です。地名と氏族の名が一致することはしばしばありますし、私もこの説に加担したいと思います。地元の人になぞねますと、昔は梅雨どきなど湖から大小の魚がいっぱい遡ってきたものだったことでした。そうした豊かさを旅の一夜の宴席でも歌いあげた作品なのでしょう。旅のものがなしさが底にひめられたよい作品です。

大 津

天智天皇の都が廃絶してから一時古津と呼ばれた時代もあったようです。人麿の長歌にも「大津の宮」と表現されていますから、万葉人にはこの地名はなつかしく重要な意味をもっていたに違いありません。

穂積朝臣老の歌1首

- わが命し真幸くあらばまたも見む志賀の



大宮川の川口

大津に寄する白波

今案ふるに、幸の年月を審らかにせず。
この歌には左註がついていて、養老元年の元正天皇の行幸か、大宝2年の持統太上天皇の御幸かといわれています。作者は養老6年元正天皇の乗輿を指斥した罪で佐渡へ流され、その途中伊香で長歌を作っていますが、その反歌と似ていますので、流されてゆく途中での作品としてみたいものです。

この作品に詠みあげているように天平12年赦免された作者はのち大蔵大輔に至りました。この人にとっては、大津の美景は生涯忘れることの出来ぬ強い印象となって保たれていたのではないのでしょうか。

田上山

今は大津市となっていますが、田上山は、もと栗太郡に属していました。この山の木は次にかかげる藤原宮をはじめ、奈良の平城宮



田 上 山

や東大寺の用材として、全山禿山となってしまうまで切りとられてしまうに至りました。

藤原宮の役民の作る歌

- やすみしし わご大王 高照らす 日の皇子 荒栲の 藤原がうへに 食す国を見し給はむと 都宮は 高知らさむと 神ながら 思ほすなべに 天地も 寄りてあれこそ 石走る 淡海の国の 衣手の 田上山の 真木さく 檜の 婦手を もののふの 八十氏河に 玉藻なす 浮かべ流せれ そを取ると さわく御民も 家忘れ 身もたな知らず 鴨じもの 水に浮きゐて わが作る 日の御門に 知らぬ国 寄し巨勢道より わが国は 常世にならむ 凶負へる 神しき亀も 新代と 泉の河に 持ち越せる 真木の 婦手を 百足らず 筏に作り 涙すらむ 働く見れば 神ながらならし 卷1 50

この1首はその格調の高さから一介の役民のよく作るところではない。恐らく人麿級の力をもつ人の作ではないかと論ぜられています。ともあれ、この作品に見えるように、田上の桧が瀬田川、宇治川を経て、淀から木津川をのぼり、奈良坂を修羅にのせられて越え、佐保川から大和川の支流を遡って藤原京へ運ばれていったのです。正倉院には石山寺にあった用材管理事務所にかかわる文書が所蔵されています。その中で田上桧で働く人数を「舎人 404人。256人山作領。107人田上山」と

記しています。近年ようやく緑を回復してゆく田上山を仰ぐにつけて、自然を大切にしなければならぬという思いが、しきりに湧きいづるのを止めることができません。

淡海の家

柿本人麿の代表作はとたずねられて近江に生れた人ならたいいは

- 淡海の家夕波千鳥汝が鳴けば情もしの 古思ほゆ 卷3 266

をあげる人が多いのではないのでしょうか。沢瀉久孝「万葉集注釈」ではこの歌について、「n音m音のくりかえしが美しい声調をなしている」とのべておられます。詩と散文の違いは、表現された言葉にリズムがあるか否かが大きな差異をしめします。日本の定型詩は5音7音の音数律がリズムの上での一つの要素を占めています。と同時に五十音図での行の上での子音のひびきあいが一首をささえる一方の柱として存在しているのです。この一首の場合には「み・み・み」と「な・な・の・に・に」のひびきあいが美しいと「注釈」はのべておられるのです。

さてこの一首は、どのような条件のもとで作られたのでしょうか。人麿の伝記は不明としかいいようがなく、万葉集に残されている作品を通して人々は類推してゆくほかはないといったところが正直なのでしょう。「近江荒都を過ぐる時の歌」、そしてこの歌ともう一首、



千鳥



柳が崎

●もののふの八十うち河の網代木にいさよ
ふ波のゆくへ知らずも 卷3 264

の宇治川の歌と並べて見る時、私は比較的長期間大津周辺に滞在していた人麿を想像せずにはられません。一方「滋賀県の野鳥」をひもときますと「水辺の秋はシギ・チドリ類が大きな群れを作って渡る季節ですが海に面していない本県には大きな群れが渡ってくることはなく、またシギ・チドリの安定した渡来地也没有。それでも湖岸の湿地、河川の河原、水田などには毎年タカブシギ・ハマシギ・アオアシシギなどが渡ってきます。なかでも守山市の湖岸周辺の水田に多く見られます」と記されています。人麿の時代もそうした自然環境であったのでしょうか。ともあれ、私はこの一首の詠われた土地は、大津京跡をうしろにし、湖に面した地を想像してみたいのです。渚近く、長等連峰に沈みゆく陽がすでに湖面からは亡びてしまって、高く飛ぶチドリにのみ残茫が残っている荒涼たる風景、その中にたちつくす人麿。……こうしてこの一首を低く朗詠してみると他県の人びとには味わえぬなつかしさがひびいてくる

のではないのでしょうか。

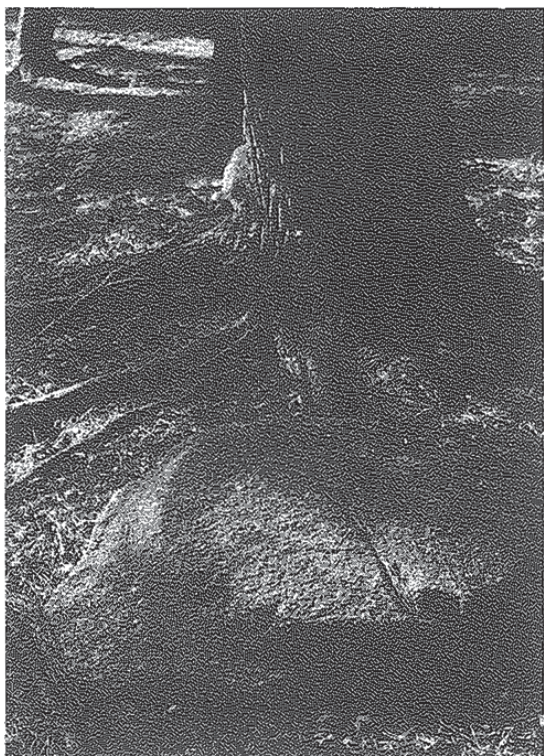
その他の名歌

●君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだ
れ動かし秋の風吹く 額田王 卷4 488

●風をだに恋ふるは羨し風をだに来むとし
待たば何か嘆かむ 鏡王女 卷4 489

この二首の前の詞書には「近江天皇を思ひて作る歌」とあります。ですから、地名は存在しなくても、大津京の後宮のいずれかで歌われたものと考えてもよいのではないのでしょうか。時は秋。ともすればものがなしさのいやまさる折しも、年令的にも30才近くになって天皇のおいでが間遠になった嘆きを歌った作品ではないかと考えられます。その嘆きに対して、姉の鏡王女が、待つことの出来る可能性をあげて、額田王をなぐさめられたのでしよう。この応答の二首なだらかな調子でとどこおるところがないところがよいと思われま。しかも深い趣きを感じとれるところ、現代短歌と比較しても決して旧くはありません。こうした名歌の数々が大津市で詠まれたことはうれしいことではありませんか。

(滋賀県歌人協会主事 山村金三郎氏提供)



崇福寺跡礎石

交通機関

逢坂山 京阪電車京
津線大谷駅下車
大津京跡 京阪電車石
坂線近江神宮前駅下
車
崇福寺跡 京阪電車石
坂線滋賀里駅下車
大宮川 京阪電車石
坂線坂本駅下車、又
は湖西線叡山駅下車
田上山 国鉄・京阪
電車石山駅下車、帝
産バス新免行にて枝
停留所下車

写真：大津宮跡…滋賀県
教育委員会提供
その他のものは、
松本蒼平氏提供

